

三寶寺の仏法僧(僧伽)の歩み

私は父を寿算91歳で通夜葬儀を僧侶の息子と二人でさせていただいた。

五月四日午前中、面会に行った。兄がタンをとっていた。エソの足を切り落とせば毒がまわらない。命がのびるかもしれない。合掌をして、ベッドをのぞきこんで、父親のもとで生まれて、仏弟子への道をつけてくれたことを言葉でお礼をのべた。

意識があるなしに関係なく、仏法僧(三帰依文)と御正信偈、御文を耳もとで小一時間となえた。意識がないのに「オーオ」と言葉を発した。私に不思議なる感動がおきた。「南無阿弥陀仏、ありがとつ」の声として聞こえたのである。

昼、入浴サービスで体をきれいにしてもらっていた。血圧130/60、元気であるが、口を少し開いて早い呼吸をしていた。午後3時30分、4時30分頃まで、戦争で戦友のためにとなえていたという阿弥陀経を、ゆっくりと何回にもわたってとなえさせていただいた。この時、二度目の不思議なる感動がおこった。私となえていた阿弥陀経は、大無量寿経の諸仏称讃の願(ほめたたえあう、尊敬と礼拝)となっていたのである。この父は、私だけでなく孫たちに、

『僧侶になろうと決めたのは、おじいちゃんや僧侶を楽しそうにやっていたのを見たからだ』と、仏法をうけつぐ発心させたのだった。

戦争の時、戦友のために読経し、戦友を抱き起こしたときにその血で染まっていた経本の話聞き、その教本をみせてくれた。父も又、仏法をうけついでいた。父が、忍耐の生き方を示してくれたから三寶寺が建立され、今みながいる。昨年だったら、悲しくて通葬の読経はできなかったが、教法をもつて次の世代をうけつぐ準備ができたことを見届けて、すべての我執から解放された涅槃に入った。法をうけつぐとは、この法によって、すべての人々が覚め、どんなことも必ず成就される(願いはうけつがれるという寿命)。

したがって、釈迦の教えから仏法には死という言葉はなく、寿命なる涅槃(すべてのしがらみから解放された)に入るのだ。この涅槃は、親鸞は苦は滅度、転ずると表現している。仏法の願は受け継がれていくものだからこそ、自然に受け継ぐと誓願されたものが涅槃である。願いの中に受け継がれていく寿である。今仏弟子として父へ称讃の読経をあげられたと息子は言ってくれた。仏法興隆の願いとして受け継がれた。

けつがれ、人々に常住なる導きとなる(如来常住)なることをもって、捨命住(じつめいぢゆう)と語られていた。

三寶(佛(如来)・法(僧(僧伽))に依(より)どころ、その教えをうけつぎますの決意)することの大切なこと

仏とは覺(大慈悲心にめざめる)、めざめの始まりは慚愧心である。無慚(anitya(はじしらす)、無愧 anapatipya) 慚愧なければ畜生と名づく、慚愧あるが故に人となす

慚は天に恥じ、愧は人に恥ず

自分はほんとうに申し訳のないものだ、とあやまるのが慚。世間の人の様子に照らして自分の過誤を知って、「こんなことでは皆様に済まない」とあやまるのが愧である。(稲津紀三著「印度哲学史」P 176、P 200)

如来はこの教法がないと世界は滅びると、法を述べつたえるために、大家に帰ってきたことを示す。これからも伝えつづける(如来常住)

阿育王(アシヨールカ王の慚愧)

釈尊入滅後120年、アシヨールカ王はインド全体統一(紀元前268年即位)

(明治書院・真宗聖典P 808、13)

カリンガ人の国を征服したまへり 追放者15万、殺戮されたもの数十万、死にたる者幾倍

意を専らにして道を究め、道を愛しみ、道を人民に宣ふるに励みたまへり、これ即ちカリンガ人の国を征服したるに

因れる天愛の慚愧なり
巖碑第13条(印哲P 48)

アシヨールカ王は釈尊の覺(めざめた大慈悲心の仏法。法とは人を気づかせめざめさせる言葉)を人生の学んでいながら、慚愧心をもって、どうすれば人が苦から滅し、歩みを正しい方に転じられていくかをアシヨールカ王碑文で証明してくれていた。これは、仏に帰依していたアシヨールカ王が、釈尊の人格を本当のことを言っているがそれをわが人生の法にとり入れるという帰依心(慚愧と規範)が碑文になった。

法に帰依するとは

法とは誰でも必ずおもわずやっつてしまふ行為、言ってしまう言葉である。

釈尊は、行為・言葉が因(原因)となり、縁(結びつき、苦が集まる)が果(結果)となることを因縁果という流れで人生をたとえた。

因縁だけでは宿業といって、先祖が、または過去に悪い業をしていたから、今、救われぬというクセが残る。そつてはなくて、今それぞれの人々がやっつていることが、世界や人々を成長させているのである。

慚愧心の中で、アシヨールカ王は殺生(prāṇatipātā)、命あるものを殺すこと、十不善業道(十悪業道)(印哲P 151)、恨(upanāha)くらみ(印哲P 115)を断ち切ることを、聖求経では七不哀退説(ふすたいせつ)この仏法なるものは、法然上人が9